

青年・成人の発達要求と大学教育 —学習・研究要求の具体化とその支援のあり方を中心に

【代表者】

西垣順子 大阪市立大学 大学教育研究センター 准教授

【共同研究者】

白井利明 大阪教育大学 教育学部 教授

岩野清美 和歌山大学 教育学部 准教授

川地亜弥子 神戸大学 人間発達環境学研究科 准教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

自らや仲間の豊かな発達を求める発達要求は、青年から成人期への発達推進力となると言われている。本研究は、大学生の学習・研究に係る要求を中心に、2つの柱により青年・成人の発達要求に応える大学のあり方を探る。

1つは、災害などで学習環境が揺らぐ状況で、学生が自らと仲間や地域の人々の発達・学習する権利を再構築しようとしていく過程の調査である。代表者と共同研究者の白井は、昨年度に本研究助成に採択され、学生の教育権についての意識の調査を行い、学生たちの社会認識が、身近で具体的な要求から深化していく過程などを明らかにした。本年度は通常の状態での大学学習に加えて、被災などの状況下での学生の学習要求と発達の関係を、教育学の研究者もチームに加えて多面的に分析する。

2つめは、大学・大学界が学問・研究を通じて成人の発達を支援する方法論開発である。具体的には、子育てしながら参加できる学術イベントのあり方検討と試行を行う。学問・研究は世界を捉えなおす営みで、研究要求もまた青年・成人期の発達要求の1つである。だが現在の大学・大学界は、人々の生活（ケアや仕事）と研究の両立を十分には支えていない。託児サービスが徐々に導入されているが、それだけでは不十分である。本研究で学術イベントの新しい在り方を探ることで、「生活しながら研究し、生涯発達する個人」を支える大学・大学界のあり方についての示唆を得る。

【研究成果（報告書より抜粋）】

本研究の特色は、青年期から成人期の発達を、彼女・彼らが「自らの発達を創出するようになる」という側面を重視して捉えるところにあった。そして本研究は、自らや仲間の豊かな発達を求め、その推進力ともなる学習要求・研究要求の充実に支援する方法の検討を目的として実施された。具体的には、(1) 大学及び暮らしていた地域の被災という状況において、自らや仲間、地域の人々の学ぶ権利と生きる権利、交流する権利を再構築していかうとする学生たちの活動についての訪問調査を行うことと、(2) 研究要求を支える取り組みとして子育てしながら参加できる学術イベントの試行を行うこと、(3) 大学生の発達要求の育成として解釈可能な教育実践を検討するラウンドテーブルを開催すること、(4) 既実施の学習要求に関する調査データの再分析という4つの計画を立てていた。

助成期間を通じて、概ね計画通りに研究を進めた。上記(1)については、熊本地震で被災した南阿蘇村黒川地区を訪問し、学生・元学生及び下宿の大家さんにインタビューを行った。建物や道路、大学カリキュラムといった目に見える復興が進む中、生活（特に学生同士や地域の人々との交流）が失われていく状況への危機意識と、被災経験のない下級生への伝承、及び地域の大人から支えられての活動の展開について、話を聞くことができた。

(2) は大学評価学会の公開企画としてシンポジウム「研究・生活とともにある大学評価—研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る」を開催した（報告は『現代社会と大学評価』第15号に掲載予定）。(3) は発達心理学会において、ラウンドテーブル「発達を創る青年たち(1)」を開催した。趣旨説明等において(1)の成果も取り入れている。(4)についても分析を行い、学年進行に対応した学ぶ権利の捉え方とその表現の仕方の関連について検討した。

研究業績

※助成期間中に本研究課題を基に発表した著書、学術論文、学会発表、報告書等

著書名/論文名/発表タイトル 等	発表年	出版社名/掲載雑誌名/学会名等
公開企画「研究・生活とともにある大学評価—研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る」	2019	大学評価学会
ラウンドテーブル「発達を創る青年たち(1)」	2019	発達心理学会

その他 ※特許、産学官連携、受賞、メディア取材など特筆すべき事項

上記研究業績のうち、公開企画「研究・生活とともにある大学評価—研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る」の内容は、大学評価学会の年報「現代社会と大学評価」の第15号に掲載される予定である（4月25日時点で入稿済み）。